

ピアジェ保育とは？

子どもの”意欲”と”主体性”を大切に”あそび”を通して子ども

一人ひとりの個性に応じた発達を促すことを目標としています。

子どもの発達にとって大切なのは、知識の量を増やすことではありません。どんなに価値のある知識でも大人から一方的に教え込んだり記憶させたりするだけでは、真に豊かな知性とはなりえません。単に記憶によって獲得した知識は、すぐに忘れてしまうか応用力にとぼしく、生活の中に生かすこともできないような不安定なものです。

それに対して、子どもが自発的な活動によって身につけた知識や能力は、柔軟でまとまりのある思考構造に裏づけされており、子どもの中にしっかりと根づいているため、目を見はるほどのダイナミックなはたらきをしめして、さまざまな分野にその能力を生かしていくことができます。

幼児期の「遊び」は大切です。「遊び」が大切なのは、その中に情緒の育ちを含めた「学び」があるからです。幼児期に芽生える「学び」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つというふうに、子ども自身が自発的に遊びを発展させていくことです。

子どもの発達の原動力は、このような、子どもが自分の五感と運動を総動員しながら、自発的・能動的に環境にはたらきかけ、探究したり、発見したり、作り変えたり、組み合わせたりするような、自発的で意欲的な操作活動で、この“活動的教育が”、ピアジェ保育の根底をなす、もっとも重要なテーマのひとつです。



ピアジェ理論とは？

スイスの発達心理学者、ジャン・ピアジェ氏が子どもの世界(論理的思考が育っていく過程)をはじめて科学的に明らかにした理論で、全世界の幼児教育の基盤となっています。

子どもは本来、与えられた知識をただ受け入れるだけの受身的な存在でなく、積極的に自ら知識を求めようとする能動的な存在であることを明らかにしました。

子どもは小さな大人ではなく、
各発達段階でそれ特有の感じ方や考え方をする独自の存在である。

子どもは大人の思考とは異なり、
頭だけで考えるのではなく、身体も使って考える。

子どもの思考は論理的というよりも直観的であり、
それだけに想像力が豊かにはたらく。

子どもは人とのかかわりの中で、物事を自分の立場だけからみる自己中心的な見方を脱して、相手の立場にも立って考える見方が生まれ、自分の立場と相手の立場をうまく強調させるようになっていく。

子どもの思考力は、正しい知識が累積されて発達していくのではなく、
子どもが自分の考えの過ちに気づき、自ら修正していく活動を通じて発達する。

子どもが発達するには、遺伝や成熟のような個人の素質的なものだけでもなければ、訓練のような環境からのほたらきかけだけでもなく、子どもが自ら周りにかかわり、周りからの反応に即して子どもの新たな仕方にかかわっていくという相互作用が不可欠である。



めざましあそび

めざましあそびは子どものあそびを尊重した「めざまし教育」に基づき、理論面と実践面から十分な検討を加えられ誕生した教材です。子ども自身が発見し、感動し、やり遂げられたという達成感を味わえるように工夫されています。

子どもにとって親しみのある具体的なものを題材として、子どものエネルギーを大きくふくらませ、意欲的にもの考えることの出来る、自立した子どもを育てたいというのがめざましあそびのねらいです。

めざまし教材とは？

目覚まし教育とは子どもが体験活動を通して、まるでめざめるように身近な環境や自分自身に目を見開いていく教育です。その中心となるのは、子どもが自らの驚きや興味に基づいて主体的に環境に関わっていく活動です。教科別、領域別に行われてきた従来の細切れ的な活動ではなく、子どもの活動全体の展開に応じて、その活動を援助していくところに特徴があります。

めざまし教育の理論的支柱となっているのはピアジェ理論でありフランスではその理論を強力に推進し、特に幼児教育・初等教育の現場で実施されてきました。

めざまし教育では子どもの学習主題を生活の中のことから引き出します。

そして、その学習主題を解決していく過程で、知ることの面白さ、楽しさ、すばらしさを体全体で実感しつつ、自分自身で知識を構成し、思考力を発達させていくのがその特徴です。



確かな理論と保育の現場から生まれた安心できる教材です。

めざましあそびは幼児心理学の第一人者で、小学校「生活科」の教育課程を作成された滝沢武久先生の監修指導を受けながら、30年以上にわたって幼児教育の研究を続ける中川登美子先生のものであって研究開発されました。

さらに全国の保育現場で、何年にもわたって実践研究を続けて確かめられた信頼できる教材です。

「あそびながら知的発達的基础づくり」 滝沢 武久

子どもの能力は、自然に成熟しながら発達していくのではなく、充分にはたらくようになるためには、これを使いこなす活動が不可欠です。この活動は一般にあそびとしてあらわれます。どんな能力も意欲なしには身につかない物ですが子どもの場合能力が芽生え始める時には必ず、自発的にこれを使ってみたいという意欲が湧いてくるものです。そしてその能力使う遊びに熟中して取り組みます。こうしてその能力がしっかりと定着し、柔軟な仕方ではたらくようになっていくのです。

子どもの遊びの特徴は、活動の中で精一杯考えたり、想像したり、工夫したり、作り出したりしながら、活動したことの実感と充実感を体験することです。また、自分の取り組んでいる活動をやり遂げたときのよろこびや、目に見えて上達していくことの楽しさを、遊びを通して味わうこともできます。このように、あそびは子どもの発展途上で自発的に出現してくるものなのですが、だからといって子どもを自然のまま放置したのでは、伸びるべき能力も伸びないでしょう。子どもが心から真剣に取り組むには、その子どもの発達段階に相応した活動の素材が手元になければなりません。

子どもがあそぶことによって、そのめざましあそびははじめた能力に磨きかけられるだけでなく、やる気と自信が大いに育まれ、かつ、あそびの中で駆使される思考力、想像力、直感力、表現力などが、ごく自然に伸びていくような素材があれば、子どもの発達にとって好都合です。

こういう見地から作成された教材がめざましあそびです。これは、シール、カード、ルーレット、おはじきなどの副教材のもつ特徴をふんだんに活用して、子ども自身の手で操作しながら調べたり、作ったり、あそんだりします。時には、その遊び方を自分で工夫して楽しむことができるようになっていきます。

また、子どもにとってあそびは一人だけであそぶときよりも、だれかと一緒にあそぶときのほうがずっと楽しいものです。めざましあそびがおかあさん、おとうさん、先生、友だちなどと一緒にあそべるようになっているのはそのためなのです。

めざましあそびでは、分類、順序づけ、対応などの論理操作や数量などへの感覚がごく自然に養われていくような配慮がとくに加えられています。子どもの論理的思考への興味や関心をめざましあそびという点でこの教材は子どもの知的発達的基础づくりに大いに貢献することとなるでしょう。

スタートシリーズ

3歳児は、運動能力と想像力が著しく伸びる時期です。

教材「スタートシリーズ・はじめてのあそび」は、保育の中で伸び盛りの運動能力と想像力とを使って思う存分あそぶことにより、教材を実際に見たり、調べたり、取り扱ったりしてイメージを確かめながら、子どもが自発的に作ったり工夫したり調べたりしつつ、遊びの中で思考力をゆたかにしていくことをねらっています。

子どもがこの教材を使ってあそぶことにより、形態の認知力、構成力・分類力などの知的能力や、空間概念・数量概念などが、ごく自然に育っていきます。

また同時に、注意力・観察力・記憶力・表現力も身についていくことでしょう。



「活動あそびとイメージづくり」滝沢 武久

3歳児は、運動能力と想像力が著しく伸びる時期です。三輪車にもブランコにも、ひとりで乗ってうまくこぐことができるし、積み木で塔やトンネルを作ってあそぶこともできるようになります。ときには、積み木を高く積んで、倒れそうになるスリルを楽しむことさえあります。とりわけ目立つのは、手先の運動が器用になることです。たとえば、描く位置を決めたうえで、クレヨンで○を描いたり×を描いたりしてあそびますが、これは形に対する目を持つことができるようになったことを示します。

また3歳児は、ままごと、お店屋さんごっこなど、ごっこあそびが非常に好きですが、これは子どもの想像力が進歩したからです。子どもはよく、積み木で必要なものを作ったり、いすや積み木などを使って運転のまねをしたり、ピストルで撃ち合いのまねをしたりしますが、この場合、頭でこのような情景を思い描いてあそぶわけなのです。

このような伸び盛りの運動能力と想像力を充分にはたらかせるようにしてやることは、子どもの知的発達にとって不可欠です。

実際、子どもがその運動能力と想像力を使って、思う存分にふけることは、子どもの思考を精一杯はたらかせ続けることであり、まさにそのことによって思考力が伸びていくものなのです。保育の中で組織的にこういう活動を刺激してやることは、3歳児の知的発達を十分に保証するものだといえるでしょう。本教材は、そういう見地から、3歳児の欲求・興味・関心などを考慮しながら構成されています。

思考とは、感覚運動的活動が内面化されることによって形成されるものです。一方3歳児は、感覚運動的活動の段階をやっと脱したばかりの時代です。そのため、思考の中でイメージを思い浮かべようとするとき、そのイメージはとにかく不安定になりがちになります。そこで3歳児は、3歳児は、絶えず物を実際に見たり、調べたり、取り扱ったりすることにより、イメージを確かめようと努めるのです。だから、3歳児の考える力が育つためには、「物」と「イメージ」の往復運動が不可欠です。

このように、子どもが自発的に作ったり、工夫したり、調べたりしつつ、あそびながら思考力を豊かにしていくことをねらったのが、スタートシリーズです。子どもがこの教材を使ってあそぶことにより、形態の認知力、構成力、分類力などの知的能力や空間概念、数量概念などが、ごく自然に育っていきます。そしてその発達と同時に注意力、観察力、表現力も身につけていくことになるでしょう。